



教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1997 発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX 0797-31-3448

〈教会シリーズ 43〉

子供は教会への特別の賜物

1 子供たちが教会で果たす役割を見過ごすことはできません。愛する子供たちについて、大いに語るべきです。子供は地上に託された、天のほほえみです。家庭と社会の宝、教会の喜びです。イエズスが「ソロモンの栄華のきわみにおいてさえ、このゆりの一つほどの装いもなかった」(マテオ6・29)と言われた、その野のゆりのようです。イエズスは子供たちを愛しました。教会と教皇も、心に脈打つ子供たちへの愛をキリストの心で感じ取らずにはいられません。実際、すでに旧約聖書の中に

子供への特別な言及が見られます。サムエル書上(1-3)には神が民へのお告げと使命を託す子供への召命が記されています。子供たちは民の集まりで、礼拝や祈りにも加わりました。ヨエルの書にあるように「子供を、乳飲み子を呼び寄せよ。」(2・16) ユナイトの書では償いの祈りが「妻と子供たち」も交えて捧げられたことがわかります。(4・10) 出エジプト記を見ると、神は孤児たちに特別の愛を示し、ご自分の保護のもとに置いておられます。(22・21、詩篇68・6参照)

イエズスは子供を愛された
詩篇33番では、子供の姿が神の愛への完全な委託のイメージとなつています。「私は魂を静め、やわらげた。母から乳離れした子のように。私の魂は乳離れした子ようだ。」(2)
後に救いの歴史の中で、預言者イザヤの力強い声が救い主への期待の成就を告げます。ダビドの王国を再建する子、エンマヌエルの誕生です。

2 さて、福音書はマリアから生まれる子が預言されたエンマヌエルであると語ります。(マテオ1・22-23、イザヤ7・14参照) この子供は神殿で神に捧げられ(ルカ2・22参照)、シメオンの祝福を受け(同2・28-35参照)、預言者アンナに迎えられます。「(この人も)エルサレムの救いを待ち望んでいる人々にその子のことを話した。」(2・38)

公生活に入ったイエズスは、子供たちへの大きな愛を示しました。福音史家マルコは「子供たちを抱き、手を置いて祝福された」(10・16)と証言しています。「優しく包み込むような愛」(「信徒の召命と使命」47番)をもって、主は子供と親たちを引きつけます。「イエズスに触れてもらおうとして人々は幼い子を連れてきた。」(マルコ10・13) 使徒的勧告「信徒の召命と使命」の中で、私は子供たちを「神の国に入るための、また主に全幅の信頼をおいて生きるための、論理的かつ霊的な条件のシンボルであり、確かなイメージそのもの」(47番)と呼びました。御国に入る条件とは単純さ、真心、謙遜です。主の弟子は子供のようにならなければなりません。啓示を御父の恵み深い御旨のしるしとして受け取る「小さな人々」(マテオ11・25以下参照)のように、ここからもわかるように、子供たちをイエズスご自身のよう迎えるべきです。「こういう子供を受け入れる者は私を受け入れる。」(同18・5)
イエズスは子供たちへの深い敬意を明らかにし、警告しました。「この小さな者の一人さえあなどらないように気をつけよ。私は言う。この子らの天使は天上にいて、常に天にまします父の前に立っている。」(マテオ18・10) 子供たちが「ダビドの子にホサンナ」と叫んだとき、イエズスは喜び、その行ないを神を賛える行為として弁護しました。(同21・15-16参照) それは敵の不信仰と対照的な光景でした。

良く理解させてくれるからです。「子供たちは私たちに次のことを思い起こさせてくれます。それは、教会の実り豊かな宣教活動に活力を与えるのは人間の手段や功績ではなく、神の全く無償のままものだということです。」（「信徒の召命と使命」47番）

繰り返すにありますが、子供は純真さの模範であり、聖性とは単純そのものであることを明らかにしてください。子供たちも年齢相応の聖性を生き、教会を築くために貢献します。

不幸にも、多くの子供が苦しんでいます。餓え、欠乏、病と語った身体的な苦しみ、両親の不和や虐待、大人の利己主義のため犠牲にされると言った精神的な苦しみなど。言い尽くせぬ苦痛に満ちた状況を見て、心を動かさずにはいられません。生きていくという以外に何の罪もない無防備な生命もその中に含まれます。彼らの側に立ち、自らの権利を主張することのできない子供たちの声とならずにいられませんか。こうした悲惨な状況の中、ただ一つの慰めは、神の恩寵がこれらの苦しみを、汚れない小羊の犠牲と神秘的に一致させる機会に変えてくれるという信仰の確信です。苦しみは子供たちの人生の価値を高め、

人類の霊的成長に役立ちます。（前掲書47番参照）

5 教会は、不十分なことが多い、子供のキリスト教教育に力を入れようとしています。それは子供たちにキリスト教の教理を教え、全ての人を大切にし、信者の家庭の美しい伝統にのっとって祈る（私たちの多くにとっても忘れられない、祝福に満ちた思い出です）ことを教えることです。心理学や教育学の立場から言

三位一体

—キリスト信者のすばらしい最終目的地

● 本日の荘嚴な典礼は、至聖なる三位一体の秘義の考察へと私たちをいざないます。私たちの知恵ではこの秘義に近づくことはできませんが、人となった神の御子イエズスが啓示してくださいました。「誰も神を見た者はいない」と福音史家ヨハネは言います。「御父のふところにまします御独り子の神がこれを示された。」（ヨハネ1・18）

えば、子供は勧められればすぐに喜んで祈るようになります。多くの親、教育関係者、要理教育者や友人もその経験があるのでしよう。これには家庭と学校が責任を持つべきことを指摘しておかなければなりません。

子供には秘跡に関する形成が必要

教会は、子供たちが秘跡生活に関する形成を受けられるよう、両親と教育者に訴えます。

特に赦しの秘跡を利用すること、聖体祭儀にあずかることによつてです。さらに全ての司牧者とその協力者にも、子供の能力に合わせる努力を勧めます。祭儀が可能な限り子供たちのために計画されている場合には特に、典礼規則の勧めに従って適用すべきです。賢く用いれば大きな効果上がるはずですよ。

6 「信徒の使徒職」に捧げられたこのカテケージスを、聖ピオ十世の言葉で締めく

くりたいと思います。彼は初聖体を受ける年齢を引き下げた理由について、「子供たちの中から聖人が現われるからです」と述べています。今までも聖人がいたに違いありません。今やこう付け加えることもできます。「子供たちの中から使徒が現われる」と。

この予見、この希望が聖ピオ十世の言葉どおり、ますます実り豊かに成就しますように。（九四・八・十七）

全被造物のために、賛美のいけにえを御父に捧げるのです。

● 信仰の神秘！ 祝された処女に願いましませう。私たちが聖体の秘義と、至聖なる三位一体の秘義にもっと深く入り込むことができますよう。

「至聖なる三位一体の住居」（コンスタンチノーブルの聖プロクリス「祈り」VI,17）であるマリア様、世の出来事の中に、御父と御子と聖霊の神が現存するしるしを読み取る事ができるよう、お助けください。聖母の取り次ぎによつて、全心を込めてキリストを愛し、三位一体を見つめつつ、目指すすばらしいゴールに向かって進むことができますように。（九七・五・二五、三位一体の祝日にお告げの祈りの時のお話。）

説教・講話・書簡等の抄訳

マリアは全ての自罪を まぬがれていた

聖母マリアと教会 シリーズII

1 無原罪の御宿りという教

義は、直接にはただマリアの存在の最初の瞬間、マリアが「原罪の全ての汚れから守られ」ることになったその時点にのみ関わるものです。教皇教導職としては、これによって長年議論的になってきた問題(聖母は無原罪であったかどうか)に決着がつけばそれでよかったです。主の御母の永続的な聖性を定めようとしたわけではありませんでした。

この真理に関しては、すでにキリスト信者の間では自明の理となっていました。原罪を免れていたマリアがあらゆる罪からも免れていたことは明らかであり、最初の瞬間に聖性を与えられたのも終生聖性を保つためであったに違いない、というわけ

2 罪や不完全さは、マリアにあてはまらない

教会は常に、マリアが聖なる者であり、あらゆる

罪や道徳的不完全さから免れていたと考えてきました。トレント公会議はこの確信を表明して「教会が聖なる処女(マリア)について教えるように、神の特典がなければ、一生涯小罪も含まれたすべての罪を避けることができる者はいない」(カトリック教会公文書資料集(5)番)と断言しています。キリスト者が恩寵によって生まれ変わり、新たにされたとしても、罪に陥る可能性がなくなつたわけではあり

ません。恩寵はその人を一生涯すべての罪から守るものではありません。トレント公会議が言うように、「特典」があつて罪を防いでくれるなら話は別です。そして、これこそがマリアに起こつたことなのです。

トレント公会議はこの特権を定義づけようと考えたわけではなく、教会が熱心に述べてきたことを言い表わしたに過ぎません。それは教会が堅く信じていることがらでした。こうしてこの真理は、単なる敬虔な信心を

はるかに越えるもの、確かな教えであり、神の民の信仰の中に位置を占めるものであると決定しました。さらに、この確信はお告げの時に天使がマリアに明かした恩寵に基づくものです。「恩寵に満ちた方」(ギリシャ語でケハルトメネ)と呼びかけることで、天使はマリアが終生完全に聖性に満ち、罪や霊的・道徳的な不完全さの影もないことを認めたのです。

3

初期の教父たちのある者は、まだ完璧な聖性を確信するまでには至らなかつたので、マリアには不完全さや道徳上の欠点があると考えていました。最近でも同じ見方をしている著者がいます。これらの意見を正当化するために福音書の本文が引用されていますが、贖い主の御母には、罪、あるいは道徳上の欠点でさえあつたという根拠にはなつていません。

十二歳のイエズスの御母に対する返答「なぜ私を捜したのですか。私が父の家にいるはずだと知らなかつたのですか」(ルカ2・49)が、それとなしの非難であつたと解釈されることがありますが、問題の場面を注意して読み返してみると、イエズスは母とヨセフが自分を捜したから咎めたのではないことがわかります。二人にはイエズスの

保護者としての責任があつたのですから。心配しながら捜し回つたあげくイエズスを見つけたマリアは、その振舞いの理由を問いただしたに過ぎません。「私の子よ、なぜこんなことをしたのですか。」(ルカ2・48)イエズスは別の「なぜ」で答えました「が、それは咎めではなく、神の子であるという秘義を示すものであつたのです。」

カナでのイエズスの言葉「婦人よ、それが私に何のかわかりがありません」(ヨハネ2・4)も、咎めだてと考えることはできません。ぶどう酒が切れて困つたことになりそうなのを見て取つたマリアは、単純に何とかしてもらおうとイエズスに話しかけました。何よりも御父の御旨に従うべきである、とイエズスは母の遠回しな要請に対して答えたのです。イエズスが最初の奇跡を行なつて栄光を示したのは、何よりも御母の信仰に込めてのことでした。

4

公生活の始めごろ、マリアと親族の者たちが会いに行つたときイエズスが話した言葉を、否定的な意味でとらえる人もありました。「あなたの母と兄弟たちが外で会いたいの言っていますよ」と告げられた

時のイエズスの返答を解釈する鍵を、福音史家ルカは与えてくれます。ここでは、他の「兄弟たち」(ヨハネ7・5参照)とは全く異なるマリアの内的傾向をもとにして考えなければなりません。イエズスは「私の母、兄弟とは、神のみことばを聞いてそれを行なう人である」(ルカ8・21)と答えました。お告げの場面で、ルカはマリアがいかに神の言葉に耳を傾け、寛大に従つたかをすでに語つています。それから察するに、この出来事は完璧に神の計画を果たしつつ生涯を送つたマリアを大いに誉め賛えているのです。イエズスの言葉は兄弟たちの意図に反するものではありませんが、マリアが神の御旨に忠実であつたことと、精神と肉体の両面に及ぶその母性の偉大さを賛えています。

明々白々とは言えないこの賞賛の言葉で、イエズスは特別な方法を用いています。もつと一般的な言い方で、マリアの気高い行ないを賛え、聖性への困難な道を歩む人類にとって聖母がいかに親しく、一致した存在であるかをはつきり示そうとしているのです。

「幸せなのはむしろ、神のみことばを聞いてそれを守る人だ」(ルカ11・28)……あなたの

説教・講話・書簡等の抄訳

母は幸せなこと、と叫んだ女に向かつてイエズスが答えたこの言葉は、マリアの個人的な完全さに疑問をはさむどころか、神の御言葉を忠実に果たしたその行ないをきわだたせるものであった、と理解する教会は、この一節を聖母を賛える典礼文に取り入れていきます。

福音書のイエズスの言葉によると、聖母が「幸い」である最大の理由は、神との親密な一致と神の言葉への完全な従順さに他ならないことがよくわかります。

マリアは全く主のもの

5 「至聖なる」マリアの、神から与えられた特権を見るにつけ、恩寵によって完成された聖母の生涯の不思議な出来事に、感嘆せずにはいられません。同時に、マリアがいつでも完全に主のものであったこと、マリアと神との完璧な一致を妨げる不完全さの影すらもなかったことがわかります。

マリアの生涯は、このように信仰、希望、愛のうちに成長し続けました。信者にとってマリアは神の憐れみを表わす輝くしるし、聖性と福音的完成の崇高な高みに導く確かな道案内なのです。

(九六・六・十九)

初期の四つの公会議は恩寵のとき

(…) 東と西の教会に共通の豊かな霊的遺産について考察してみたいと思います。本日は、東方の総大司教区とローマとが完全に一致していた時代、特に東方で開催されたいくつかの大さな公会議について考えます。それらは、普遍教会にとって不滅のものです。

周知のように、最初の四つの公会議(三二五年から四五一年にかけてのニケア、コンスタンチノープル、エフェズ、カルケドンの各公会議)は特に重大な役割を果たしました。当時の数々の歴史的事件や、用語上の困難にも関わらず、これらの会議は恩寵の時であり、キリスト教信仰の基本となる秘義に神の霊があふれるほどの光を注いでくださったのでした。

公会議の重要性を過小評価することができません。そこにはキリスト教の基礎が、あえて言うならばその核心そのものがかかっていたのです。ニケアとコンスタンチノープルでは、みことばと聖霊の神性が確認され、それによって三位一体の秘

義への信仰が明確に述べられました。エフェズとカルケドンでは、キリストの神性と人性が討論された結果、一方の本性を強調しすぎて他方をおとしめたり、二つを切り離してキリストのペルソナの統一性を危うくする人々に対し、キリストは完全な神性と人性を備えておられ、この二つは混じり合うことも別々に切り離されることもあり得ず、みことばというペルソナに統合されていることを明らかに宣言しました。キリストは真の神であり、真の人なのです。

このみことばの総合は、聖霊の助けと東西教会の貢献によって達成されたものでした。もちろん、公会議の開催については緊張の種も多々ありましたが、最終的には神の恩寵に強められた生きた信仰の感覚が、最も困難な時期をも乗り越えたのです。言うまでもなく、実り豊かな全教会的「協力」を(抑圧するのではなく)保障するのがペトロの後継者の役目であることは明らかです。それを如実に示すのは、教皇レオ一世が大司教コン

スタンチノープルのフラビウスに送った手紙です。この手紙はカルケドンでの教理決定に大きな役割を果たしました。兄弟姉妹の皆さん、教会は祝福された処女の母親らしい取り成しに守られながら現在も旅を続けています。四三一年、エフェズ公会議は聖母を「テオトコス」すなわち神の御母と認め、神の御子キリストに人性を与えたことを強調しました。今、私

たちも信頼してマリアに頼ります。東でも西でも同様に愛されている聖母は、常にキリスト信者を変えることのない信仰の真理にすぎない留め、神学や教会の伝統の正当な多様性に目を開かせてください。多様性は交わりをそこなうどころか豊かに富ませてくれますから。紀元二千年の大聖年を目前に、この交わりがますます深まりますように。(九六・七・七)

教皇さま、連帯の文化をアピールされる 〈若者たちへ〉

★ UNIV (世界学生会議) のため各国から集まった学生の皆さん、ようこそローマへ。

大学は、社会の将来を形作る重大な場です。ですから皆さんも、人類の行く手を左右する覚悟で勉学に励んでおられることでしょう。福音の価値観に力づけられた個人の努力のみが、現代の大きな問題の数々に対する答えを出すことができます。実にまことの文化とは、何よりも良心の深みで響く呼びかけであり、社会を改善するため個人が自分自身を改善するべきであるという義務を与えます。キリス

ト信者なら、真理と倫理と責任の間には切っても切れないつながりが存在することを知っています。そこで信者は、真理への責任を負っていることを感じ、真理に仕えるためなら自分の自由をも後回しにします。

★ 今回の学生会議のテーマは「多文化社会、競合と協力」です。共産主義の神話が崩れた後、残るのは自由市場だけだという理論を反証するのが目的です。実際、この理論には限界のあることがはっきりしてきました。同理論は「無拘束」の経済に道を開くと共に、深刻

な疎外と失業、種々の不寛容と人種差別をもたらしました。

健全な道徳に根ざした新しい道を取らなければなりません。教会の社会教説によれば、神の似姿として造られた人間の尊厳を、常に政策や法思想、経済計画や社会理論の基礎に据えるべきなのです。人間は他者との関係の中で生き、育ちます。それが家庭であり、社会です。ある集団の中に生まれることによつて身に付いていくもの、すなわち文化や言語は、人と人をつなぐ要因にこそなれ、排除する道具になつてはなりません。

信仰を持つ者にとつて、それは自明の理です。「仕えられるためではなく仕えるため」(マテオ20・28)に來られた師の後に従い、キリスト者は仕えることを理想として追い求めます。将来のより良い社会は、連帯の文化の上に成り立つべきものであると確信しているのです。ボランティア活動の活発さは、皆さんの選択を物語っています。経済的に恵まれない地域での何百という有益な仕事、社会助成や援助のための無数のプログラムの同様に、一時的でない、福音の精神にのっとつた社会を建設する努力の表われです。

★ 次回の世界青年の日のためのメッセージでは、ヨ

ハネ福音書の中の言葉を若い人たちに送りたいと思いました。「先生、あなたはどこに泊まっておられますか?」「見に来い。」(1・38-39)キリスト

信者がイエズスに出会う数々の「場所」の中でも、注目したいのは人間の苦しみです。「苦しむ人のある所、イエズスに出会うことでしょう。…イエズスのおられるのはどこであれ、人々の苦しむ場所です。権利を拒まれ、希望を奪われ、切なる願いを無視されている場所です。そこに、人類のただ中に、御名において全ての涙をぬぐうようにとお望みになるキリストが住まわれるのです。」(第十二回世界青年の日のメッセージ)

このように考えると、皆さんの進めるべき社会計画は、キリストの呼びかけに基づく新しい世界を建設する望みを確かなものとしませう。実にキリストは、単なる博愛に終わらない、皆さんの努力の最終目標です。貧しい人々の物質的必要を満たすことで満足してはなりません。人々をキリストのもとに連れていくのです。キリストただ一人が全ての涙をぬぐい、本当の救いを与えてくれるのですから。

何と広大な分野が、皆さんの使徒職の前に広がっていること

でしょう!キリストに出会った人は誰もが、自分がキリストの贖いのわざにあずかつており、人類を救うための協力者であると感じるはずでです。この自覚は、キリストをもつと知り、その憐れみ深い眼差しを人間に向けていただこうという望みを心にかき立てるでしょう。そのために皆さんはみことばを黙想し、祈り、赦しや聖体、その他皆さんを導くキリストの秘義と出会うためのすぐれた手段を活用します。

教会一致運動とカトリック信者

第二バチカン公会議を振り返る シリーズ13

今はこちらでキリスト教一致祈願週間です。この機会に、第二バチカン公会議がエキュメニカル(教会一致)運動について述べていることに耳を傾けてみたいと思います。特に顕著なのが「エキュメニズムに関する教令」です。

公会議はキリスト者の間の分裂を「つまずき」であり、「明らかにキリストの意志に反する」(エキュメニズムに関する教令1番)と説明しています。実際、聖霊の賜物を通して、イエズスはご自身をかしらす

★ 学生会議のテーマには、「競合」という文字があります。キリスト信者にとつて、それは何よりもまず、もつと良くなるう、徳を育て、もつとキリストに似た者になろうとする内的な戦いです。福者ホセマリア・エスクリバーが言うように、これこそ皆さん一人ひとりが他者のため実りある奉仕をするための道です。「私たちの生活に神のご計画を導入してくださるよう主に頼みなさい。頭の中だけでなく心の奥に、そし

て全ての外的活動の中にも。」(「神の朋友」3番) 人類の救いは、各人の聖性を求める戦いを通じてもたらされるのです。(…) 若者の皆さん、日頃の尽力に感謝します。キリストとの一致から生まれる喜びを、世界中に運んでください。福音の新しい証人となつて、力を合せて愛の文明を築き上げてください。皆さんを聖母のご保護のもとにゆだね、私からも愛を込めて、祝福を送ります。(九七・三・二五)

★ もう一つの公会議文書が「東方カトリック諸教会に関する教令」です。これは東方典礼に従う、聖座と完全な交わりを持った諸教会についての文書です。

公会議は「東方諸教会の諸制度、典礼儀式、教会伝統及びキリスト教的な生活の規律を高く評価している」(同1番)と賛え、「東方諸教会が、西方教会のように、固有の特別な規律に従つて統治する権利と義務を持つて持っている」(同5番)ことを明言しています。東方教会の昔からの伝統が全教会にとつてまことの宝であることは、同じ公会議での東方諸教会による貢献が大きかったことから明らかで

不変の教え

「ここにいない人たちのために場所を」と訴えたアンチオキア大主教マキシモ四世の姿は、深い印象を伴って忘れることができません。それは、完全な一致を待ち望む正教会の兄弟たちのことを指していました。

「東方カトリック諸教会に関する教令」は、完全な一致という憧れのゴールが単調な画一性におちいつてはならず、むしろあらゆる正当な多様性を総合した有機的な一致でなければならぬことを明らかにしています。

ベトロの後継者はこのような一致のための奉仕者、保証人として召されています。

■ 祝された処女、教会一致の母が、弟子たちに繰り返し返し伝えられる主の御声の力を感じ取らせてくださいますように。「私は門の外に立つてたたいてる。」(ヨハネ黙示録3・20) 主イエズスは、勇気をもって人生を見つめるように全ての人に向かって呼びかけ、紀元二千年を目前にする今、教会一致の情熱と望みをさらに深めるようせきたてておられます。キリストと教会の御母が、洗礼を受けた全ての人のために、贖い主の呼びかけにすぐにも応じる忠実さを手に入れてくださいますように。

(九七・一・二二)

●6・7 ポーランド訪問中の教皇さまはザコパネのファティマの聖母聖堂を祝別された。この聖堂は一九八一年の教皇暗殺未遂事件の後、教皇さまの無事を感謝して、市民の手によって建てられたものである。「あの事件の時、私は生命の危険に直面しましたが、同時に神の大きな憐れみをも体験しました。ファティマの聖母の取り次ぎで、生還することができました。」

「ここで再び聖母に感謝いたします。…皆さんの祈りと犠牲にお礼を申し上げますと共に、もう一度、教皇登位の時と同じ願いを繰り返します。私のために祈りください。仕えることができるよう、助けてください。私も日々、皆さんのために祈っています。」

「正午、聖家族教会を訪問。初聖体を受ける三百人の子供たちを前に、「子供たちよ、イエズスは皆さんを愛しておられます！さつき皆さんは特別な方法でそれを体験しましたね。イエズス様がパンの姿で皆さんの心の中においでになりました。これは大きなお恵みですが、大きな仕事でもありません。どんな時でも純粋な良い心でイエズスを愛すること。」

「両親と先生たちにお話しになった。」「自らの確信に従って子供たちを教育するのは誰よりも親

教皇さまの動き

の権利であり義務です。子供や若者に知識を与えてはくれるが親身な世話や愛情の証しを与えることができない機関に、この権利を譲り渡してはなりません。」

夕方、クラクフ市に到着。市内の教会で。「人間にとって神の憐れみ以上に必要なものはありません。慈悲深く同情に富み、人間の弱さを越えて神の聖性の無限の高みにまで引き上げてくれるのが神の憐れみです。」

「教会は常に、神の憐れみを願ひ求めています。特に現代のように危機的な時代にあつては、人類にのしかかり、脅かす様々な悪のただ中で、神の憐れみを祈り求めずにはいられません。」

●6・8 ポーランドの司教・大司教に当ててメッセージを送られた。「教会の任務は、道德の基礎を築くことです。夫婦と家庭に始まり、国家、国際的な協力関係にまで及ぶ様々な人間共同体が、その基礎の上に発展し、実を結ぶことができるように。」

夕方、大学の学長たちと会見された。「大学の使命は真

理に奉仕すること、真理を探し、人々に伝えることです。真理は人間を超えて存在するもので、人間は真理を創造することはできません。人間が根気よく尋ね求めるとき、真理は自らを表わします。」

「学者は特別な倫理感覚を必要とします。道德観は科学に不可欠な真と善を保たせてくれます。真と善を切り離すことはできません。学問研究の自由は、個々の学者の倫理責任と不可分の関係にあります。倫理上の相対主義や功利第一の態度は、科学のみならず個人と社会にとって直接に危険を及ぼします。」

●6・9 病院をご訪問。「医学は固有の倫理を見失ってはなりません。ヒポクラテスの昔から変わらないその倫理は、全ての医師に人命の絶対尊重を要求しています。」

入院患者たちにも一言。「毎日、皆さんの苦しみの傍らにありたいと思っております。私も何度も入院生活を経験していますので。」

●6・10 夕方、ローマへの出発間際、空港で人々に別れを惜しみ、「いつもながらお別れの時は辛いものです。」

5月31日から始まった今回の司牧訪問は、これまでの故国への訪問中、最も長期間だった。

同日、第1回中東カトリック

信徒大会に寄せた教皇メッセージが発表された。「中東のカトリック共同体は、普遍教会の一部であると同時に独自の、異なった典礼の伝統から来る文化・歴史・神学・霊性の遺産を有します。この相違が、それぞれの共同体を富ませ、教会の一致を強める契機となるよう信徒の方々には頑張っていたいただきたいものです。」

「共に助け合い、支え合いながら責任あるキリスト者、和解と対話と平和の遂行者となってください。全てを神的な調和のうちにこなすよう努めましょう。分裂は悪の源です。」

●6・15 早朝、バチカン庭園のルルド前で、ローマ神学校の学生たちにミサを立てられた。「自問してください。この一年間、信・望・愛において成長したか？聖霊の賜物を深めることができたか？怠慢の赦しを願わねばなりません。まず先に感謝を捧げることが必要です。」

正午のお告げの祈りで、今回のポーランド訪問は「絶えずどんな時も聖母が傍らにいてくださることを感じた」と語られた。また紛争状態にあるアフリカの国々について、仲裁が成功し、秩序が戻ることを願うと共に、人々への愛と尊敬のみが国家の平和と繁栄を約束することを再度訴えたい、と話された。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙。毎月十日発行。定価 送料とも一部百八十六円。年内定期購読 送料とも七月号から九七二円。一月〜十二月号二、〇八七円。詳しくは精道教育促進協会まで。

郵便振替 01130-8-72393